

『夕焼け空のその後で』

ー空翔ける羊飼いの群れシリーズ 5ー

第一章 「ファズアースの使者」

今日は久々の休日、この3日間というものの綱渡り的なオペレートが続けたためにもうくたくただった。なんせこの3日間、睡眠とトイレの時以外に *POWLA-KNIGHT* の前から離れることはなかったのだ。

数時間前によくくま先輩からワクチンが届いて、あたし達はやっと *POWLA* から開放された。もう暫くは *POWLA* の前に座りたくないって気分。

なんかよく考えてみれば、ほんの1ヶ月前まではあたしはキャティにいて、シュレのことばかりを考えて暮らしていたような気がする。どうもキャティに三好先輩が来てからというもの、あたしの生活は急に忙しくなってしまった。あの人が今どこで何をしているのかは分からないけど、とにかく任務完了を確認しないことにはあたしはここを離れることができない。

そりゃあ今でもキャティに早く帰らなきゃという気持ちは変わっていない。しかし、そういう気持ちとは別なところで、今はここを離れたくなかった。自分の中にこうした相反する気持ちが存在していることに気がついてから、あたしはずーっとイライラしていた。

部屋の中に一人でいると、なんだかドロドロに落ち込みそう。でも、でかける元気ももう残ってない。誰でもいいからそばにいて欲しかった。誰でもいいから話し相手になって欲しい。こんなどうにもならないことを考えている暇を作りたいくない。

「そう思って遊びにきてあげたわよ。」

「えっ…？」

部屋の中にはもちろんあたししかいなかった。事実、改めて部屋の中を見回してみたが、やっぱりあたししかない。しかし、今の声はあたしのよく知っている声だ。

以前信州にいた時住んでいた部屋は、キャティに行く時にきれいに引き払ってしまった。まあ、キャティに行けば用意された部屋があることは知っていたし、少なくともあの時はもう地球に戻ってくる気があたしにはなかったのだ。

という訳で、今あたしが住んでいるこの部屋は、あたしが室長になった時に和岐さんから与えられたもので、局長と和岐さん以外誰も知らないはずだった。

「水臭いわよね、いつのまにかこんないい部屋に住んでいるんだもの。連絡ぐらくれればいいのに。」

やっぱり、間違いない、この声は…。

「柴ちゃん！」

もう声ははっきりと聞こえるのに、相変わらず姿は見えない。一瞬テレパシーかとも思ったけれど、柴ちゃんの声はしっかりと耳から聞こえてくる。

「ここよ、さすがに明子ちゃんでも分からなかったみたいね。」

ふいに部屋の一角の空間が歪む。何もなかったはずの空間が、少しずつ別の物に置き換えられてい

く。最初はでたらめな模様のように、それが次第に人間の形になっていく。

「あたしには残念ながらESP能力なんてないもの。」

べつに柴ちゃんのESP能力が羨ましいわけじゃないけど、こういうのを目の当たりにしてしまうと、なんとなく気になってしまう。

「べつに便利ってわけでもないんだけどな。ESP研にとじ込められる生活でよければ、いつでも代わってあげるわよ。」

「思いっきり遠慮します。」

「で、何を落ち込んでいるの？」

「分かっているんでしょ？」

「ま、そりゃ、長いつきあいだからなんとなくは分かっているけど…。でも、それを言ってしまったら話し相手になんないじゃない。」

確かにそれは柴ちゃんの言うとおりのだ。あたしは話し相手が欲しかったんだっけ。

「柴ちゃんはキャティのことは心配じゃないの？それとも、それほどキャティには思い入れがないの？」

柴ちゃんはこのあたしの質問にちょっと考えて、なぜか唐突に手に持っていた袋を差し出した。

「その前にお茶でも入れてくれないかな。おいしいクッキーを買ってきたんだ。」

「あ、気がつかなくてごめん。」

あたしは慌ててお湯を沸すために立ち上がった。

キッチン…と言っても、べつにここで食事を作るわけじゃないから、必要最低限の物しか揃っていない。それでも、お茶を入れる道具だけは無理を言ってもいい物を入れて貰ってある。

「MR-7星が爆発した時のことを覚えている？」

「もちろん、覚えているわよ。忘れるわけがないじゃない。」

紅茶の入ったポットとティーカップだけ先に柴ちゃんの前に並べる。

「あの時、あたし達3人はキャティと一つになった。」

そう、その通りだ。シュレが言った言葉…。キャティの夢とあたし達の夢とシュレ達の夢が一つに重なった時、夢はより現実に近い希望になると言った。そして、そのシュレの言葉通りにMR-7星は爆発し、新たにバーミリオンキャットが生まれた。

あたしはあの瞬間、確かにみんなと一つになった自分を感じていた。

「あの時、一つになったからこそあたしは言っているのよ。あたしがキャティとともに生きる決心をしたのもあの時だし、そしてシュレの行く末を見届ける約束をしたわ。」

「本当に…？」

「な…何よ。何か違うって言うの？」

「シュレはもう来ないでくれって言ったんじゃないの？」

「え…、それは…。」

なんで柴ちゃんがそんなことまで知っているのよお。あの時一緒にいたのは三好せんぱいだけだったのに。

「明子ちゃん、最近あたしに隠していることがあるんじゃない？」

「ない…。」

「本当かなあ。」

「あっても言わない。」

「じゃあ、もうこれ以上は聞かない。でも、よく覚えておいてね。キャティについては、べつに明子ちゃんだけでなく他の人も心配しているってこと。」

あたしがキャティに行っていた間、柴ちゃんはずっとESP研究所にいたはずなのに、ひょっとしたら色々な状況はあたしより詳しく把握しているかもしれない。

Myaが地球を去る時にあたしと柴ちゃんに1枚のフロッピーディスクを残していった。あたし達2人は、Myaからの連絡が1年以上途絶えたらこれを見ようという約束をして、その約束通りに1年後に見た。

ディスクの内容はあたし達3人の出生についてであり、和岐さんの若い日の苦悩でもあった。自分の出生が普通でないことは薄々気がついていたし、べつに驚きはしなかったけど、3人にそれぞれ与えられていた特殊能力については多少のショックも感じていた。

柴ちゃんにはESP能力、Myaには情報収集能力。でも、あたしの能力は2人の触媒としての役割しかない。2人とは違って単独としては何もできない能力。

べつに特殊な能力が欲しいわけじゃない。ただ、Myaがいない、3人が揃わない状態での自分の存在意義が見出せない。あたしは何のためにここにいいのか、それが分からなくなっているのだ。

「明子ちゃん、お湯が沸いているみたいだけ。」

柴ちゃんに言われて反射的に立つ。そういえばお湯を沸していたんだっけ。

「たぶん、そんなことじゃないかなとは思っていたんだけど。明子ちゃんさえその気なら、あたしはいつでも協力するわよ。」

「え…、聞こえなかった…。」

協力するわよ…の部分はどこから続くのか、聞いていなかったんだ。

「明子ちゃんの特特殊能力は行動だったはずでしょう。だったら、とりあえず何も考えずに行動しちゃうべきなんじゃない？理屈ばかりこねていて、何もしない明子ちゃんなんて何の価値もないと思うけど。」

「だって、あたし室長なんだよ。」

「誰が文化部の室長は外に出ちゃいけないって決めたの？誰もやったことがないなら、明子ちゃんが1番目になればいい。」

柴ちゃん、きついよ、それ…。柴ちゃんにそう言われたら、反論のしようがないじゃない。

考えてみればまさに柴ちゃんが言ったとおりで、あたしはキャティにいるという安心感だけで何もしていなかった訳だし、いきがかり上、三好せんぱいの計画にのって地球に帰ってはきているけど、帰ってきてからだってあたし自身は何もしていない。ただ周りが言うとおりに動いているだけ。

「実を言えば、あたしもちょっと欲求不満が溜まっているのよね。」

「えっ…？」

「だってMR-7星の爆発の時は、あたし達は事件の中心にいたのよ。それなのに今回はファズアースの件もPOWLAの件もカルーンの件も全部かやの外。こんなことって許せると思う？」

「許せない。許せないけどお…。」

「しかも、連邦政治局を辞めたはずのあの和岐さんが指揮を取っているにもかかわらずなのよ。」
そう言われればそうだ。どうして和岐さんが目の前にいながら、あたしはそれを聞かなかったんだろう？

「もし、あたし達は3人揃っていなければ価値がないなんて思っているんだったら、見返してやるべきよ。もし、明子ちゃんが行動しないなら、あたし1人でもやるわよ。」

なんか話しがずれてきたような気がする。最初はあたしが愚痴をこぼすはずで、柴ちゃんはその聞き役だったはずなんだけどな。いつのまにか立場が逆転している。

でも、こういうのも悪くないな。なんか昔の何も考えずに3人で突っ走ることができた頃を思い出す。あの頃のあたし達には、組織なんてまるで関係なかったもの。

「やってみようか。何ができるか分からないけど。」

「そうこなくっちゃ。」

第一章 「ファズアースの使者」

H6. 24. MAR

第二章 「ステーション R X」

「まずはこれからやることを整理してみましょうよ。」

あたし達はファズアースへ行くためにステーション R Xに来ていた。表向きは任務ということになってはいたけど、実は局長と大喧嘩の末に飛出したのであった。

まずは文化部の室長が外に出ていくこと自体、局長は快く思っていなかったし、柴ちゃんの手配が E S P 研預りとなっていて微妙なこともあるらしかった。しかも、POWLA のトラブルもある。たしかに現在は落ち着いているとはいえ、POWLA がああいう状態では言われても仕方がないとは思っていた。とりあえず今後のことは全部和岐さんに押しつけるという形で強引に飛出してきてしまったのだ。和岐さんは呆れながらもとくに文句は言わなかった。

「まずはファズアースに行くのよね。」

「そう、今回一番の謎がファズアースだもの。あたしが調べた範囲では、連邦政治局内には正式な報告書が一枚もないの。」

「たぶん情報部が隠しているのね。でも、そうするとあたし達に分かるのは、和岐さんに聞いた範囲だけってことになるわね。」

実際にファズアースに行ったことが確認されているのは、和岐さん、Ryo 先輩、佛木先輩と研修生が 1 名。あと、ひょっとしたらハスラムさんか…。

「ファズアースではリアムに会うのが目的ね。」

柴ちゃんがいつのまにか紙とペンを持出してきて、いろいろとメモしてくれる。1 番と書かれた後ろには、今言った内容を書いていく。

「2 番目は？」

「どうしようかなあ…。」

「柴ちゃん、何よ。」

「うん、2 番目にしていいいものかどうか悩むところなんだけど…。」

「だから、何よ。」

柴ちゃんは言いかけて悩んで、それを数回繰り返した後、やっと諦めたように口を開いた。

「2 番目の謎は三好せんぱいの死だと思う。でも、これについては明子ちゃんが何か隠しているようだからなあ。」

うっ…、柴ちゃんにこう言われると本当に辛い。でも、任務上の約束である以上、たとえ柴ちゃんといえどもここで話す訳にはいかない。

「柴ちゃん、本当にごめん。」

「分かっている。明子ちゃんが言いたがっていないのはよく分かっている。でも、もしその必要が出てきた時には、必ず話して貰うからね。」

「ありがと…。」

柴ちゃんは 2 番目と自分が書いた部分に少し空間を空けて、その下に 3 という数字を書く。

「次は何にする？」

「3 番目は、現在失踪中の市瀬中尉ね。」

「あたしはちょっとしか彼女に会っていないから、何とも言えないけど。」

市瀬中尉は POWLA-KNIGHT の試験稼働の頃から姿が見えなくなっていた。そのすぐ後に起きた

ウィルス騒ぎに気を取られ過ぎて、誰も彼女がいなくなったことに気がつかなかったのだ。

「あたし、どうしても腑に落ちないことがあるの。」

「なあに？」

「彼女、カルーンのメンバーだと言ったわよねえ。」

「うん、*Ryo* 先輩が会議で言ったんだから、間違っていないとは思うけど…。それがどうしたの？」

「どうして彼女がカルーンのメンバーと分かっているながら、うちの情報部は何もしなかったのかしら？何か具体的な行動があってもよかったと思うんだけど。実際には何もなかったでしょ？妙だと思わない。」

柴ちゃんの疑問はもっともだと思う。あたしだって感じていたことだもの。実際に会議で *Ryo* 先輩にいじめられていた時に、何回これを言いたかったことか。でも、情報部は縦の関係が強いから、*Ryo* 先輩が悪いんじゃないことはよく分かっている。

「じゃあ、3 番目の謎は、市瀬中尉は本当にカルーンのメンバーなのか。本当にカルーンのメンバーだとしたら、うちの情報部が何もしないのはなぜなのか。こんなところでいい？」

柴ちゃんは口に出して言いながら、紙にも同じことを書いていく。

「カルーンの本当の目的は何だったのか…というの？」

「それは分けた方がいいでしょう。4 番目ね。」

柴ちゃんは更に下に 4 と書くと、カルーンという項目を作る。

「カルーンとはどういう組織なのか。また、その目的は何なのか？」

「カルーンって *CAPER*A システムを経営している企業よね。今回のウィルス騒動で一番徳をしそうなのは、どう考えてもカルーンってことになるけど、実際にはどうだったのかな？」

「*Ryo* 先輩の報告では、確かに何人かの市民が *POWLA* から *CAPER*A へ乗り換えたらしいんだけど、全体の 100 万分の 1 程度だって言ってた。つまり、実際には *POWLA* がダウンしている間に市民を *CAPER*A 側に引き摺り込むことも出来たはずなのに、カルーンは何も行動をしなかったことになるわね。」

「どういうことかな。ちょっと考えられることを挙げてみるわね。」

カルーンと書いた下に括弧を付けた数字を書いていく。

「ええっと、まず *CAPER*A がなんらかの理由で壊れていて、使用することが出来ない状態である。」

「じゃあ、実は今回のウィルス騒動が、カルーンとは何も関係がなかった。」

「そうね、考えられなくはないと思う。ちょっとひねって考えると、何もなかったのもカルーン側の計画の内だったなんて見方も出来るけど。でも、そうすると他に何か企んでいることになって、あたし達にとっては厄介なんだけだね。」

「じゃ、こういうのは？カルーンの内部で 2 派に分かれていて、今回はたまたまともな方が勝っていたとか。」

「考えられなくはないと思うけど、可能性は小さいわね。」

柴ちゃんは今まで出したものを次々と書き留めていく。

「こんなところかな。明子ちゃん、他に何かある？」

「ううん、ないと思う。」

「じゃあ、そろそろ時間だし行こうか。」

そういえば、もうそんな時間だった。そろそろカリフォンの発進準備も終わっていることだろう。

ステーションRXは比較的最近作られたステーションのせいか、デザインもすっきりと他のステーションからは一新されている。機能的にも以前の数倍の人間を処理できるようにあっちこっち工夫もされていた。

そういう訳で、あたし達がコンコースに来ると、物凄い人数の人達がそこにはいた。もっとも、ここで列を作っている人達は定期観光船で往来する人達であって、あたし達みたいに専用船で来ている訳ではなかった。だからあたし達がこの混雑の中にいたのもほんの僅かな間だけで、奥の専用船用のコンコースにはほとんど人がいなかった。

月、火星、木星と次々に植民地を開拓してきた現代でも、一般市民が太陽系の外に出るというのは高価な贅沢でしかなかった。せいぜいが太陽系内にいくつかあるステーションを周回する定期観光船に乗るくらいが精一杯だろう。

あたしと柴ちゃんはガラガラのコンコースへ抜けて、少しほっとしていた。いくら他にたいした娯楽がないとはいっても、とてもじゃないけどあの中に何時間も並んでまで定期観光船に乗りたくないなんて思わない。

「さあて、カリフォンはどっちかしら…。」

たいがい専用船のコンコース側には暇そうにしているステーションの係員がいるはずなんだけど、今日に限ってそれが見当たらない。仕方がないからドックを一つ一つ確認していくことになる。

「おかしいなあ、誰か一人くらいいてもいいのに。」

「あっちがあんなに混雑していたから、手伝いに行っちゃったんじゃないのかな。」

「それにしたって、出発予定時刻は前もって言ってあるんだから、時間には戻ってきてくれないと…。」

「あつ、あそこ。誰か立っているみたいよ。」

柴ちゃんの指差した方、つまり一番奥のドックの前に確かに誰か立っている。しかし、服装がここから遠目に見てもステーションの制服でないことがすぐ分かる。

「なんかステーションの人じゃないみたいだけど。」

「そうみたいね。でも、とりあえず行ってみようよ。」

「うん。」

どうせカリフォンを捜していく内にあそこまで行くだらう。そして、その予想通りに、一番奥のドックに辿りつくまでにカリフォンは見つからなかった。

「ねえ、ひょっとして、あの人…。」

今度も柴ちゃんの方が先に気がついた。さっきからそこに立っている人物が、どうもあたし達の知っている人物によく似ているのだ。そして、それもたぶん当たっているだろうという確信が湧いてきた。

「うん、どうもハスラムさんみたいね。」

「そういえば、彼も謎の一つだよね。実際にあの子のプロフィールって公開されていないんですよ。」

「じゃあ、ハスラムさんの正体っていうのが5番目の謎ね。」

「でも、うまくいけば5番目の謎はすぐに分かるかもしれないわよ。」

そうだ、柴ちゃん的能力を使えばハスラムさんが何を考えているのか分かるはずだ。

「やあ、待っていたよ。カリフォンの準備はもう出来ている。」

「どうしたんですか？」

「和岐に頼まれたんだよ。2人についててやってくれと。」

「えっ…。」

よく考えればハスラムさんはファズアースに行ったことのある内の一人…。

「じゃあ、あたし達と一緒にファズアースに行ってくれるんですか？」

「そのつもりで来たんだけどね。もし、君たちに断られなかったらの話しだけど。」

ハスラムさんはそう答えながら、かなり柴ちゃんを気にしている。ひょっとしたら、和岐さんから柴ちゃん的能力について聞いているのかもしれない。

「もちろんOKです。ね、柴ちゃん？」

…と、柴ちゃんもハスラムさんをジーツと睨み付けたまま動かない。ハスラムさんと柴ちゃんがお互いを睨み付けたまま微動だにしくなってしまった。

「柴ちゃん…。」

柴ちゃんがハスラムの心を読んでいるのは分かるんだけど、それにしても今までこんな状態になったことなんてなかった。考えられることは、ハスラムさんが柴ちゃんの行動に気がついて心をシールドしているってこと。でも、そうするとハスラムさんも能力者ということになる。

「柴ちゃん！ハスラムさん！」

いい加減、ここで睨み合いを続けていても埒があかないので、強引に2人を引き離してしまう。ようやく2人はお互いの視線を外し、あたしの方を見る。2人の間でいったいどういう決着がついたのか、その表情からでは分からなかった。

「そろそろ行きます。」

もうなんだか分からないけど、こうなったらとにかく行動あるのみ。あたしは立ち止まっても仕方ないんだから。

なんか急にいてもたってもいられなくなってきて、2人を置いてさっさとカリフォンに乗込んでしまう。コンソールで最終チェックをやっているところへ2人がやっと乗込んでくる。柴ちゃんはいつもの通信士の席に、ハスラムさんはサブコンソールに就いた。

「ステーション側はいつでもいいと言っている。」

柴ちゃんはいつもの落ち着いた声でそう告げる。

「発進してもいいでしょうか？」

これはハスラムさんへの問いかけ。今まで *Mya* 以外の人間をサブにしたことってなかったので勝手が分からない。*Mya* だったらこんな風にいちいち訊かなくっても、彼女が何を考えているのかはだいたい分かっていたから…。

「いつでもどうぞ。」

ハスラムさんの一言でカリフォンに火が入る。そして、ゆっくりとステーションRXをあとにした。

第二章 「ステーションRX」

H6. 24. MAR

第三章 「ファズアースの謎」

カリフォンが降りた場所は砂漠の真ん中だった。今までのファズアースに関する報告書を読む限りでは、ファズアースそのものに対する描写は見事なまでにばらばらだった。従って、あたし達が降りた場所が砂漠だったにしても、あたしはさほど驚きもしなかった。

だいたいあたしはこういうシチュエーションを一度体験していた。そう、数年前にあのソルトリバーで…。あの時よりは情報がある分、状況はいいと言える。

360 度見渡す限りの何もなかった。あたし達はここでリアムという不思議な住人に会わなければならなかった。彼だか彼女だかはどうも精神生命体らしいので、コンタクトを試みるのは必然的に柴ちゃんの役目になる。

柴ちゃんは既にリアムとのコンタクトに成功しているみたいで、じっと目を閉じたままさっきから一言も喋らない。

「ハスラムさんが以前来た時もこんな感じだったんですか？」

「海だったよ。見渡す限りの海洋だった。」

へえ、ハスラムさんってこんな感じで喋る人だったっけ。なんかハスラムさんのイメージって、文章より単語で会話するって感じだったんだけど。ここにきて初めてまともに会話したような気がする。

「リアムがいたわ。すぐこっちに来てくれるって。」

柴ちゃんがやっと目を開けてそう伝える。その言葉が合図だったかのように、あたし達の周りの風景が絵の具のように溶けていく。

「なんか目がおかしい。」

いったん溶けていったものが今度はべつの形を作り始める。

「明子ちゃん、驚いちゃ駄目よ。ここは心理的なものがそのまま物理現象に影響を与えるみたいだから。」

驚いちゃ駄目って言われたって、それじゃいったいどうしたらいいっていうの？

「受入れるんだ。今ここに見えている物すべてを認めるんだ。」

表情を読まれた…かな？あたしが心の中で悪態をついたと同時にハスラムにそう言われてしまった。

いまや完全に砂漠は消え去り、あたし達は建物の中にいた。きちんと 3 人分の椅子が用意されている。

あたしが部屋の中の物に気を取られている間に、ハスラムさんと柴ちゃんはいつのまにか椅子に腰をかけていた。そして、部屋の隅にリアムが立っていた。

「ようこそ、我々はあなた方 3 名を歓迎します。」

リアムは割とはっきりとした喋り方であたしと柴ちゃんに手を差し出した。一瞬どういう意味が分からなかったが、すぐにそれは握手を求めているんだと分かった。あたしは慌ててその右手を握り返す。

ヒンヤリ…というより、かなり冷たい感じ。まるで氷と握手したみたい。

「あなたは 2 度目ですね。」

ハスラムさんには握手の代わりに親しみのこもった言葉を送る。やっぱり、ハスラムさんはここに

来たことがあるんだ。

「太陽系から遠ざかっていたはずだ。」

ハスラムさんは唐突に核心をついた質問をぶつける。リアムはちょっと困った表情を浮かべ、何も答えない。見ようによっては答えることができないというようにも見える。

「ファズアースが太陽系に近付いてくるのは困るんだ。」

しかし、ハスラムは重ねて言葉をぶつける。

「今すぐ進路を変更してくれ。」

リアムの姿が一瞬ぼやけて、すぐに笑顔が現れる。

「分かりました。ファズアースはたったいま進路を変更しました。」

佛木せんぱいの報告書を思い出した。たしか具体的な希望は確実な未来となって現れる。それがファズアースの特性…。

リアムは最初ハスラムさんに質問されたから困惑した。しかし、はっきりとした要望には答えることはできる。しかも、リアムはハスラムさんの要望に対してすぐに対処しなければならなかった。ファズアースの法則に従って…。もし、それがすべての事柄に対して有効であるなら、試してみるべきことがある。

「あたしがこれから出す疑問に対し、あなたの分かる範囲内で正直に答えて下さい。」

あたしの言葉に対し、リアムはゆっくりと頷く。

「しかし、条件があります。」

「えっ…？」

まさかリアムから条件が出されるとは思ってもみなかった。そんなこと佛木せんぱいの報告書には一言も書いてなかったぞお。

「あなたが出す疑問にはあなたにしか答えられません。それでもよろしいですか？」

意外な条件…。だって、あまり意味がない条件なんだから。柴ちゃんがそばにいれば多少離れていたところで全部の会話は聞いてしまうだろうし、口止めはしていないんだから後でいくらでも第三者に伝えることができることになる。

「本当に条件はそれだけですか？」

「はい。」

「では、それでいいです。」

でも、柴ちゃんはあたしほど楽観的な表情をしていない。あたしは大丈夫よ…と言いかけた途端、足下から粘土状の物がせりあがってきて、あっという間に柴ちゃん達と引き離されてしまう。

「柴ちゃん！」

既に壁となったものを叩いてみても、感触の悪い弾力が叩く衝撃を吸収するだけ。

慌てて心の中で柴ちゃんを呼んでみるが、不幸なことにまったく応答がない。どうも完全にあの2人と引き離されてしまったみたい。こうなったらあたし一人でやらなきゃならないわね。

「さあ、始めましょう。」

リアムの姿がさっきよりいくぶんか薄くなっている。透明感が増したと言った方がいいかもしれない。

あたしはさっき柴ちゃんと2人で出しあった謎について、心の中で順番にチェックしていた。

「まず、ファズアースとはいったい何なのか？」

「ファズアースとは我々の母星であり、船であり、家であり、実像のない物です。また、我々自身と言ってもいいでしょう。」

「つまり、ここに存在しているものは、物理的に存在しているのではなく、すべて精神的に存在しているということ？」

「厳密には違いますが、だいたいそうと言えます。」

そうなるとこの壁も精神的な遮蔽物ということか。もし、あたしがリアムより精神力が強ければ、この壁を破ることも可能なんだ。

でも、そうすると一つ意地悪な疑問が沸き上がる。もし、ファズアースその物の存在を否定してしまったら、いったいどうなるんだろうか？ファズアース上では具体的な希望は確実な現実になるという。リアムより強い希望が出たら、リアムはそれでも希望を叶えるのだろうか？

なんとなくやってみたいという欲求を押さえるのに、自分の中で格闘する羽目になる。

「どうして進路を自由に変更できるのに、太陽系に向かっていたの？」

「ファズアースの進路は、ファズアース上のすべての生物の意志の総和によって決定されます。しかし、誰かがとくに強い希望を出した場合は、それが優先されます。」

「では、誰かが太陽系に戻ることを望んだ。もしくは太陽系に向かうことを望んだ生物が多かったと判断していい訳ですね。」

リアムは少し困ったような表情を浮かべる。たぶんそう見えるだけなんだろうけど。

「先日、一人の地球人がここへやってきました。その地球人が太陽系に戻るように望んだのです。」

「その人の名前を教えてくださいませんか？」

「イチノセ…と名のりました。」

市瀬中尉がここに…？やっぱり彼女はカルーンのメンバーなの？でも、だとしても今となっては彼女の行動は意味がない気がする。

「彼女はその他に何か望んだの？」

「地球上にある *POWLA* というコンピューターを使用不能にしてくれと言いました。」

「*POWLA* をねえ…。ねえ、使用不能にするはずだったのは *POWLA* だけ？他のコンピューターについて何か言っていなかったの？」

「*POWLA* だけです。しかも、*ANDREA* と *CATELINA* という施設に関しては絶対に使用可能の状態にしなければならないという条件までついていました。」

ANDREA と *CATELINA* は使用可能の状態…？*POWLA* システムを壊すには、いくつかのポイントを使用不能の状態にすればいいんだ けど、その中の最も重要なポイントが *ANDREA* と *CATELINA* の2つの衛星。はっきり言って *POWLA* 本体よりここを狙われた方が確実にシステムは止まる。

確かに *AVITASION* が稼働した現在ではあまり関係のない話しではある。だけど、彼女がこのことを知っていてこうした要求を出したとは思にくい。しかも、*POWLA-KNIGHT* が稼働した現在となっては、*POWLA* を使用不能にしても何のメリットもないような気がする。いったいなんでそんなことをしようとしたのか、どう考えても理屈にあわない気がする。ますます市瀬中尉という人間が分らなくなってくる。

「でも、*POWLA* を使用不能にするだけの理由なら、何もわざわざ太陽系まで来る必要はなかったんじゃないの？」

「いいえ、ファズアースの力が使用できるのは、ある一定の範囲にある物に対してのみなんです。あの時点での距離では地球上にある物に対して、なんらかの影響を与えることは不可能でしたから。」

これでファズアースに対する謎のほとんどは解けたと言っていいだろう。他の質問はリアムに訊いても仕方がないような気がするし、そろそろあの2人との合流を考えないと。

「質問は以上ですか？」

リアムはあたしの考えたことを察したのか、あたしが言いだす前にその答えを口にしていた。たしかに任務上の質問はこれで全部なんだけど、実は個人的にリアムに訊いておきたいことがあった。一瞬訊こうかどうしようか考えて、それを心の奥に仕舞い込んだ。今はまだシュレに会わない方がいい。そんな気がしたのだ。

ここでシュレの居場所を訊いてしまったら、今すぐにでも会いに行きたくなってしまうに違いないから。

「はい、あの二人に会わせて下さい。」

リアムが頷くのと同時に周囲の壁が少しずつ薄くなっていく。その壁が完全に消えるのと同時にあたしに向かって飛んできたのは柴ちゃん。ハスラムはちょっと離れた壁に寄り添っている。

「ねえ、どうだったの？」

「うん、ばっちり。詳しくはあとでね。」

柴ちゃんは少し拗ねたような表情を作って、それでもすぐに諦める。

「さあ、地球に帰ろう。まだやらなきゃならないことはいくらでもある。また、やるべきことも見つかったはずだ。」

ハスラムさんは意外にも割と冷静で、まるであたしがリアムと何を話したかをしっているような感じ。

「では、あたし達帰ります。ありがとうございました。」

「ええ、分かりました。また機会があったらいつでもいらして下さい。ファズアースは常にどこかに存在していますから。」

常にどこかに存在している…か、何かよく考えると妙な台詞。しかし、あたしたちはあとになってこの時のリアムの台詞を理解したのだった。

第三章 「ファズアースの謎」

H6. 24. MAR

第四章 「あと一つの結び目」

「そうか、いや…、ありがとう。」

あたしと柴ちゃんはファズアースから戻ると、さっそくリアムから聞いたことを局長に報告していた。もちろん和岐さんも同席していたが、なぜかハスラムさんはいなかった。

「今回の件はいろいろと情報部の圧力もあり、思いどおりにいかないことが多い。しかし、もう少し待ってくれ。今にはっきりとした通達が出るだろう。そうすれば君たちの苦労も少しは楽になるはずだ。」

珍しく局長がよく喋る。たぶん、それだけ事態が厳しいということなのだろう。

「で、現実の話として、*POWLA* システム全体のパフォーマンスはどの程度まで落ちているんですか？」

「*POWLA-KNIGHT* がまだ 100%稼働していないせいもあるが、約 30%ぐらいしか出ていないのだ。」

それまでどちらかというあまり表情を作っていなかった局長が、急にいつもの苦虫を潰したような表情になる。まあ、本来なら *POWLA-KNIGHT* が完成した時点で、*POWLA* 本体を停止させても、システム全体のパフォーマンスは上がるはずだったんだから無理も無いんだけど。

「そんなに *CAPER*A の妨害が大きいんですか？」

「いや、それどころか *CAPER*A は現在動いていないんだよ。先日の治安局の捜査で *CAPER*A は停止処分を受けているからね。」

「えっ！」

意外な回答に質問をした柴ちゃんの方が驚いている。*CAPER*A が動いていないのに *POWLA* システムのパフォーマンスが 30%では、まるで実用にならないことになる。

「*CAPER*A 側はいったい何を考えているんだろ…？」

もしあたしがカルーンなら、こんなチャンスを見逃すはずはなかった。たとえ停止処分を受けているにしろ、そんなことは初めから分かっていたことだろうし。幹部のほとんどがいなくなった現在でも、*CAPER*A にとってチャンスだということくらいは知っているはず。

「和岐さん、ちょっと確認したいんですけど。」

「なんだい？」

何かがあたしの心に引っ掛かった。

「*CAPER*A システムには大きなバグがあったはずですよ？」

「ああ、そう聞いているが。」

「カルーンに残っている技術者が *CAPER*A システムを作り直しているとは考えられませんか？」

「しかし、それにしてはタイミングが良すぎると思うが。*POWLA* のパフォーマンスにしても常に変動している。今日は確かに 30%だが、明日は 80%まで回復するかもしれない。私たちがさえ予測できないものを *CARON* が予測して、なおかつそれに合せて *CAPER*A を改修するのは、不可能に近いと思う。」

「あたしは市瀬中尉がリアムに依頼した内容が気にかかるんです。」

カルーン側が、もし本当に現在の *POWLA* の状態を正確に予測していたとすれば、今のカルーンの動きは何か説明できるような気がする。

「湯浅中尉、もう少し詳しく説明してくれ。」

珍しく局長が身を乗り出してくる。

「ひょっとしたら…、これはあくまでもあたしの仮説ですが、*POWLA-KNIGHT*には何か重大な欠陥があるのではないのでしょうか？そして、カルーンがその情報をかなり正確につかんでいるとすれば、今回の動きは説明できるのではないかと思うんです。」

「ウイルスが仕掛けられるくらいだ、考えられなくはないな。」

例の苦虫を潰したような顔…を見せるかと思った局長が、意外と普通の表情だったりする。ということは、あながち見当はずれの仮説ではないということなんだろう。

「湯浅中尉の言いたいことはよく分ったよ。至急、情報部にカルーンを探らせよう。あと、*POWLA-KNIGHT*については指田大佐に確認しないとな。」

和岐さんは急にあっちこっちに連絡を取りだした。いつもなら局長がそういうことをやっているのに、まるで局長の業務を和岐さんに渡しちゃったみたいに見える。

暫く忙しそうにしている和岐さんを見ていて、一つ思いだしたことがあった。

「明日の朝にはすべての情報が揃うだろうという話した。持つかないな。」

和岐さんはあたしたちにそう言うと、急に不機嫌そうな表情になる。

「どっちにしても *POWLA* に行ってみる必要があるな。」

「そうですね。」

局長と和岐さんはお互いに頷くと、そのまま黙り込んでしまう。仕方がないので柴ちゃんに視線を走らせると、柴ちゃんは首を横に振っている。つまり、柴ちゃんにも状況は掴めない訳ね。

「あたしたち、もう下がってもいいでしょうか？」

重苦しい空気に耐えかねて、取りあえずそう切りだしてみる。

「ああ、もう下がってもいいよ。ありがとう。あ、明日の朝、緊急会議を開くから、湯浅中尉は出席してくれ。」

「はい、分りました。」

あたしと柴ちゃんは軽く会釈をして局長室を出る。

ひょっとして…、どうしても不思議な感覚が胸を駆け抜ける。三好せんぱいのことをふいに思いだしたのだ。

三好せんぱいは死んだことになっているが、本当は生きているはずなのだ。きっと誰かに姿を変えているに違いない。ひょっとしたら、それが和岐さんなんじゃないのかと、さっき電話をしている和岐さんを見ていて思ったのだ。

和岐さんが信州に現れた時の唐突さといい、どうもタイミングがよすぎるような気がする。それに、もしあたしの推測が正しいならば、一緒にいるはずの *Mya* のことを知らないというのも納得ができる。

しかし、あたしには確認する術がない。いや、あったとしても、まだ任務が完了していない以上、彼の正体を確認すべきではないだろう。

なんとなく理性では分っているんだけど、感情がなぜか揺れていた。

「明子ちゃん、また隠し事？」

どうやら、ずーっとボーッと歩いていたらしい。柴ちゃんが話しかけてくるまで、自分が部屋に戻ってきたことに気がつかなかった。どこをどうやって歩いてきたのかさえ記憶がない。

「べつに話して欲しい訳じゃないけど、一人で悩まないで打ち明けて欲しいな。」

「悩んでいるつもりはないんだけど、ちょっと気になることがあったから。そう見えているんならごめんなさい。」

まだ柴ちゃんにも言えないな。もし、三好せんぱいが本当にあたし達の近くにいるんなら、きっとなんらかの方法で接触があるはず。それを待ってみても遅くはない気がする。

「じゃ、いいわ。あたしも明子ちゃんには黙っていることがあるし、お互い様ということで許してあげる。」

「ありがとう。」

さてと気持ちを入れ替えなきゃ。文化部の部屋に戻ってきたら、あたしは室長なんだから。柴ちゃんに甘えてばかりはいられない。

「ちょっと POWLA-KNIGHTの様子を見てくるわ。」

「もう少し休んだら？」

「でもアリコちゃんにずーっと任せたままだから。」

「そうか…。」

身体は正直いつてくたただった。キャティから戻ってきて以来、ゆっくりと休む間もない気がする。でも、まだまだやらないといけないことが山のように残っているのだ。

でも、ゴールはもうすぐやってくる。そう確信していた。理由は分らないけど、もうすぐすべての謎があたし達の目の前で明らかになる。

まるでぐしゃぐしゃに絡みあった紐を、少しずつ少しずつ解いている時の感覚。あと一つ、あと一つの結び目さえ解くことができれば、この紐は1本の綺麗な紐になるはずなんだ。

「明子ちゃん、やっぱり明子ちゃんが室長で正解だと思う。あたしにはとてもじゃないけどそんな芸当はできないもの。」

「何よ、急に。柴ちゃんだって、柴ちゃんにしかできないことがあるじゃない。あたしはたまたまこの役目がきてしまっただけだから。中途半端ってのも気分が悪いじゃない。」

「いや、その走りだしたら止まらないぞって感じが、明子ちゃんらしいというか、あたしには真似ができないなと思ったの。」

そういつて柴ちゃんはいくすくす笑い出す。

「何言っているのよ。あたしに走れと言ったのは柴ちゃんじゃないの。」

「そりゃ、そうなんだけどね。」

そうだ、こんな所で立ち止まっている場合じゃないんだ。あと一つ、あと一つの結び目はあたしがなんとしても解いてやらなきゃいけないんだ。

「でも、置いていかれるのは嫌だからね。あたしも一緒に走るから、頑張ってよ、湯浅室長。」

「うん。」

第四章 「あと一つの結び目」

第五章 「*POWLA* の叫び」

「指田せんぱい、そろそろミーティングの時間ですよ。」

くま先輩の研究室に行くと、案の定また机に向かったままだった。「あれっ、今日ってミーティングでしたっけ？」

「和岐さんが緊急会議を開くって、聞いてませんか？」

「聞いてません。和岐さんからは、いつか会議を開くからとは言われていましたけど、具体的にいつという連絡は受けていません。」

「どっちにしてもいいです。時間がないから一緒に来て下さい。」

まったく *POWLA-KNIGHT* に関する会議だと自分で言っていた癖に、一番肝心なくまさんに連絡しないなんて、和岐さんったら何を考えているんだろ。

のんびりと立ち上がるくまさんを急かして会議室へと向かう。

「で、今日はいったい何が議題なんですか？」

「えーっ、それも聞いていないんですか？」

「だから、本当に何も聞いてないんだって言っているでしょ。」

もう信じられない。まったく抜けているだから。やるならやるできちんとやって欲しい。どうしてあたしがこういう部分で苦労しなきゃなんないのよ。

「すいません、遅くなりました。」

会議室に入ると、既に和岐さん、ハスラムさん、*Ryo* 先輩、シモ先輩が揃っていた。

「遅い！まったく、いつになったら会議を定刻通りにスタートできるんだ。」

「言っておきますが、今日は会議の時間を聞かされていなかったんだから、定刻に来ようと思ってもできなかったんです。」

くまさんも負けじと反論する。

「えっ…？」

皆の視線が一斉に和岐さんに注がれる。

和岐さんは一瞬たじろぎながらも苦笑する。

「申し訳ないんだが、これは湯浅中尉の早合点のようだな。今日の会議には初めから指田大佐は呼んでないんだ。」

「えっ？」

今度はくま先輩だけがあたしを攻めるような目つきでじっと見る。

「だって、昨日の和岐さんの言い方だと指田せんぱいもてっきり出席するもんだと…。」

「確かに *POWLA-KNIGHT* の件では連絡すると言ったし、事実その通りに連絡したよ。しかし、それと今日の会議は関係のないことだったんだがね。」

和岐さんは怒っているというより、受けて笑っている感じだ。

「関係ないのでしたら、私は帰って続きをやりたいのですが。」

そう言って帰りかけたくま先輩を *Ryo* 先輩が手で制止する。

「まあ、待てって。せっかく来たんだから指田も参加していけよ。だいたい、今日の議題からして指田が出席していないのは不自然だしな。」

「そうそう、僕もどうしてくまが欠席なのか理由を教えて欲しいな。」

あらあら、なんかシモ先輩まで加わって陰湿な雰囲気になってきた。こういうのってなんか嫌だな。あたしの方が帰りたくなってきた。

「今日の議題は *POWLA* の調査だったはずだな。それと指田大佐がどういう関係があるんだ？なんか2人の会話を聞いていると、この議題に指田大佐がいないのはどう考えても不自然と言っているように聞こえるんだが。」

ハスラムさんが和岐さんの弁護という訳でもないと思うんだけど、2人に質問をぶつける。

「いや、だって…。ほら…。」

*Ryo*先輩は思いつき言いにくいといった感じで、シモ先輩の方を見る。で、シモ先輩も言いにくいって顔で和岐さんを見ている。

「どうやら、ややっこしい雰囲気になってきたな。仕方がない、指田くんの同席も認めよう。指田くん、どうする？」

「そういうことでしたら、ここで帰るのもなんだか気分が悪いし、お邪魔でないなら出席します。」

「では、始めよう。」

なんか、あたしの勘違いのせいで会議の冒頭から妙な雰囲気に包まれている。

「で、今日の議題はいったい何なんですか？」

くま先輩の問いかけにシモ先輩が黙って資料を渡す。くま先輩は暫くそれを読んでいて、そして不意に顔を上げた。

「で、*POWLA*に誰を行かすつもりだったんですか？」

くま先輩から渡された資料を読むと、そこには関東平野にあるという *POWLA* 本体へ、今回の不具合の原因を調査にしに行くようなことがかかれていた。

関東平野と言えば、まだ放射能の影響がかなり残っている場所では有名じゃない。まだ、あたしが生まれる前には、日本の首都が東京というところにあったということは知っていたけど、まさか *POWLA* 本体がそんな場所にあるとは思わなかった。

「それはこれから決める予定なんだが。それとも何かいい案でもあるかい？」

なんかわざと挑発している感じもある。だって、そんな放射能の影響が残っている場所に誰が行くのかという話しになったら、サイボーグのくま先輩が行くことになるのは目に見えているじゃない。あ…、だからだったのか。

「私が行きます。」

「駄目だ。君が今ここを離れたら、誰が *POWLA-KNIGHT* のメンテナンスを行なうんだ。」

「しかし、私が一番の適任者です。 *POWLA-KNIGHT* は私でなくても大丈夫です。」

「それを言うなら、この調査は君である必要は全くないんだ。君の出る幕はないと言ってもいい。」
なんか、どう聞いていても和岐さんはくま先輩に行かせたくないみたい。なんで、こんなにも反対しなきゃいけないのかが分からない。そして、それは他の3人も同じことを考えていたようだった。

「ちょっと、いいですか？」

「ああ、なんだい？」

*Ryo*先輩が二人の間に割って入る。

「今聞いていると、どうも和岐さんは最初から指田には行かせたくなかったみたいなんですけど、何か理由でもあるんですか？」

「いや、何もない。ただ、私は指田くんである必要はないと言っているだけだ。」

かなりぶ然とした表情になっている。和岐さんにしては珍しいと思う。

「では、私も指田を推薦します。本人も行きたい様だし、彼なら他の者より帰ってくる確率が高いと思います。」

「ぼくも同意見だな。なんか理由があるというのならともかく、何も理由がないのならくまが行った方が確実だと思う。」

二人の意見にくま先輩は大きく頷いている。

「でも、私には分からないな。なぜ指田くんが行くと他の者より確実なんだ？」

「それは…。」

ハスラムさんの言葉に、思わずみんなでくま先輩を見てしまう。

「これは一部の人が知らないことだし、あまり自慢することでもないのだからここだけの話にして欲しいんですが、私は訳あってサイボーグなんです。」

そう言いながら、左腕を取り外してしまう。

「ですから、他の生身の人よりはこういう作業には慣れているんです。分かっていただけでしたか？」

「それは知ってはいるが、でも頭は生身なんだろう？放射能の影響を受けることには変わりがないと思うが。」

「まあ、そうですが。」

くま先輩は左腕を取り付けながら軽く頷く。

「じゃあ、*POWLA-KNIGHT*を今から誰かに引き継いだとして、どれくらいの時間が必要だ？」

「3日あれば…。」

「行って帰ってこれると思うが、どうかな？」

この「どうかな？」という問いかけは、主に *Ryo* 先輩に向けられたものらしい。*Ryo* 先輩はちょっとハスラムさんを睨み付けると。

「俺もそう思うよ。」

投げ捨てるようにそう言い捨てた。

「では、誰なら *POWLA* へ行くのに適任だというんですか？」

「私が行こう。元々そのつもりだった。」

「和岐さんが？」

「冗談でしょ。」

Ryo 先輩とシモ先輩とが同時に叫ぶ。

「この中で実際に *POWLA* を見たことがあるものは私しかいない。また、少なくとも *POWLA* については、まだ指田くんより詳しいという自負がある。私以上の適任者は他にいない。」

「そう言われれば…。でも…。」

「私は *POWLA* の叫びに導かれてここに戻ってきたんだ。私には *POWLA* に会う義務がある。そして、15年前の借りを返さねばならないんだ。」

15年前の借りって、それってひょっとして…。

Mya から預かったファイルの中に書かれていたもの。まだ、東京に連邦政治局があり、和岐さんが研修生だった頃の記録。ちょっとした爆弾の処理の間違いから、東京は死の砂漠となった。

そして何人かの負傷者が出てしまった。その中に指田則和の名前があったのだ。直接和岐さんが手を下した訳ではないにしろ、きっと和岐さんはそのことで今でもくま先輩には負い目があるのだろうと思う。その事故のせいでくま先輩の身体がサイボーグ化していることも、和岐さんにとっては苦い思い出の一つなんだろう。

そういう意味からすれば、あたしだって 15 年前の借りをここで返さなければ、たぶん一生後悔することになると思う。あと 10 年も待てば東京はまた以前のように人が住むことができると言われていて。しかし、あたしにはそこまで待っている時間がないかもしれないのだ。

「あたしも行きます。和岐さんが行くというのなら、あたしも同行します。」

「え…っ？」

みんなが一斉にあたしを見る。いったい何を言い出したんだと言うかのように。

「明子ちゃんまで、どうして？」

シモ先輩の言い方は、そんな馬鹿げたことは言うもんじゃないよとでも言っているかのよう。実際、あたしだってそう思う。

「理由は和岐さんが一番よく知っているはずです。」

その答えを期待してか、今度は和岐さんがみんなの視線を浴びることになる。

「それが自分にとって一番良い方法だと言うのであれば、反対はしない。」

「ちょっと和岐さん。じゃあ、明子ちゃんを連れていくというんですか？」

「何か問題でもあるのか？」

「だって、女の子ですよ。」

「中尉の資格を持っているんだ。男も女もないと思うが。」

「文化部の室長がやる仕事ではないと言っているんです。」

「だから、いつもいつも指田くんに行かせればいいという訳か？」

和岐さんの目がちょっときつくなる。和岐さんは普段はぼーっとしている分、一度怒りだすとちょっと厄介だ。

「シモ先輩、論旨をすり替えないで下さい。これは和岐さんがあたしを連れていくかという話ではなく、あたしが行きたいか行きたくないかという話しのはずです。もし、議論をしたければあたしとやって下さい。」

「明子ちゃん…。」

シモ先輩としては2人とは議論をする気がないみたいで、不機嫌そうな顔のまま黙り込んでしまう。

「指田くんの意見はどうなんだ？」

ハスラムさんが雰囲気を変えるためにくま先輩に意見を求める。

「どちらでも。行けと言われれば行きますし、行くなと言うのであれば他にやることがない訳でもないので遠慮します。」

「では、指田くんの居残りは決定だな。お二人ともそれでいいですか？」

「ああ、俺は構わない。」

Ryo先輩は意外な結末にニヤニヤしている。

それにひきかえシモ先輩の方はまだ機嫌が直っていない。黙ったまま、首だけ上下に振っている。

「では、POWLAに行くのは、和岐と湯浅中尉と私の3人でいいですね。」

「えっ？」

「ハスラムさんも行くんですか？」
さらに意外な展開に、さすがのあたしもちょっと驚く。
「何かあることを考えれば3人くらいが一番妥当な人数だと思いますが、それとも私と行くのは嫌ですか？」
「いえ、それとこれとは話しが…。」
「よし、決定だ。出発は夕方5時でいいだろう。下村くん、指田くん、高橋くん、あとのことよろしく頼む。」
和岐さんが頭を下げて会議は終わった。

第五章 「POWLA の叫び」

H6. 12. APR

第六章 「そして真実は語られる」

「和岐さん、こんな時になんなんですけど、一つ聞いておきたいことがあるんですけど。」

「なんだい？」

「今でも指田先輩のこと、負い目に感じているんですか？」

この辺はもう東京に入っている頃。あたし達はソルトリバー博士が造ってくれたとかいう反重力カーで、昔は首都だった東京に向かっていた。

途中まではもちろん普通のルートで来ることができたんだけど、ちょうどソルトリバー研究所のあるあたりでムービングロードもハイウェイもなくなってしまった。どうするのかなとは思っていたけど、和岐さんは博士から奇妙なデザインの車を借りてきた。

なんかエアカーでも通れないような場所でも進むことができるとかで、反重力を利用していると説明してくれた。

乗り心地は意外とよく、信州を出てからはっきり言って暇を持て余していたと言ってもいい。

もともとハスラムさんは喋らない人だし、あたしも必要がなければ話しをしないので、必然的に和岐さんが一人で喋っていた。話題はほとんど木星でのオレンジ栽培の話で、それはそれでとても面白いんだけど、いまいち和岐さんが三好先輩の変装ではないかと疑っているあたしには空々しく聞こえる。

で、いい機会だと思ったあたしは、本当に唐突に質問をぶつけてみたのである。

もし、彼が本物の和岐さんだとしたら、あたしの疑問に答えてくれるだろうし、もし彼が三好先輩だとしたら、何かのヒントにはなるのではないかと思ったのだ。

「そうだな、感じていないといえば嘘になるかな。一応は当事者だからね。」

「でも、和岐さんが直接手を出した訳ではないんですよ。」

「そりゃそうだが、現実には私が間違えなければあの事故は起きなかった訳だし、彼もああいう姿になることもなかったはずだ。それに彼だけじゃない、私は多くの人間の人生を変えてしまったんだ。」

「他にも何かあったんですか？」

「佛木局長だよ。彼も本当は局長の椅子に座るはずではなかったんだ。しかし、形としては責任をとるということで、信州の局長になったんだ。本当は外へ出ていくはずだったのに。」

あの局長が外へ出て行きたがっていたなんて初めて聞いた。およそそんな話しには無関係だと思っていたんだけど。あっ、だから佛木先輩が外に出たがっていたのをあんなに反対していたのかな？

「それが和岐さんが言うところの 15 年前の借りなんですね。」

「いや、違うよ。」

一瞬、ガクッときてしまう。じゃあ、いったい何なんだって言うんだ？

「15 年前の借りというのは実は POWLA の方なんだ。」

「POWLA の…。」

「ちょうどいい機会だ。話しをしておこう。」

和岐さんはそう言うと、小さい溜息をついた。

反重力カーはもう東京のほぼ中心地まで来ていた。たぶんここから POWLA のある場所まではあと 10 分くらいのはずだった。

「実は指田くんが造った *POWLA-KNIGHT* なんだが、あれとほぼ同じものを私も造っていたことがあったんだ。まあ、あれほど完成されたものでなかったし、プログラム自体は *POWLA* で開発していたこともあって、*POWLA* がなければ動かない代物だったけどね。」

「じゃあ、何で今回の騒動でそれを言い出さなかったんですか？」

「言ったところでどうにもならないところにあったからさ。」

「どこですか？」

「*POWLA* の中だよ。*POWLA* の中に作りかけのプログラムが今でも動いているはずだ。*POWLA-KNIGHT* が未だに 100% の稼働ができないのは、たぶんそのプログラムと干渉しているせいじゃないかと考えているんだ。」

驚いた。あの *POWLA-KNIGHT* でもあたしにとっては理解の外にある代物なのに、それを 15 年も前に造っていたなんて。15 年前じゃ、たぶん *POWLA* だけで充分だったはずで、将来処理が低下するほど人間が増加するなんて予想もしていなかったに違いない。ということは、おそらく周囲には理解されなかったことは容易に予想ができる。

「本当はこんなことになる前にもっと早く処分しておきたかった。しかし、あの事件の中では事後処理に追われていて *POWLA* どころではなかったし、やがて放射能の影響から *POWLA* のある関東ブロックは閉鎖されてしまい、*POWLA* へ近づくことさえできなくなってしまった。たとえ連邦委員長という肩書きの者でも、*POWLA* へ行くにはそれ相当の理由が必要だったんだ。」

「でも、理由が必要なのは今回も同じなんじゃないんですか？」

「ああ、責任はとるよ。人類の生活を犠牲にしてまで隠し通すことじゃないからね。そら、そろそろ到着だ。」

ゆっくりと反重力カーのスピードが落ちていく。思った以上に建物はそのまま、もっと瓦礫の山を想像していたあたしはちょっと奇妙な感覚に襲われていた。

科学部が用意してくれた特殊なスーツに着替える。スペーススーツほど物々しくはないものの、顔の部分はフルフェイスタイプになっていて、ちょっと息苦しい感じを受けて面倒くさい。ただガイガーカウンターが放射能を微量ながらも示している以上、仕方のないことだった。

「用意がよければ行くぞ。」

声は思ったより普通に聞こえる。

「はい。」

ハスラムさんも黙って頷いている。

和岐さんがハッチを開いてまず外に出る。続いてあたし。最後にハスラムさん。雰囲気としては誰もいない小諸駅前って感じ。なんか思いっきり叫びたくなってしまう。

「悪いけど、静かだからって大声だすなよ。」

「えっ…。」

思わず和岐さんの顔を凝視してしまう。

「なんだよ、やっぱり考えていたのか。なんかやりそうだなと思ったんだけど。」

あたしってそんなに考えていることが顔に出るのかしら。

「あそこ…。」

ハスラムさんがそっと指をさす。その指さす方を見ると、見たこともない偵察艇が 1 機停まっている。

「どうも我々より先にここへ来ている者がいるようだな。」

和岐さんの足が少し速くなる。あたしは慌てて後を追いかけることになる。

その偵察艇が停まっている建物がどうやら旧連邦政治局らしい。建物の入り口に東京支局という文字が見える。

「*POWLA* 本体って東京支局の中にあっただけですか？」

「地下1階が科学部の部屋でね。その更に下の階に *POWLA* が設置されていたんだ。」

たぶん和岐さんは毎日ここで仕事をしていたんだろう。迷いもせずに建物の中に入ると、一目散に階段を降りていく。

地下1階を通り過ぎ、地下2階の扉を開いたところで和岐さんの足が急に止まった。

「やっぱり先約がいたようだ。」

ゆっくり進む和岐さんの陰から、ようやくその先にいる人物が見えてくる。

「市瀬中尉！」

なんでこんな所に市瀬中尉がいるの？

「どうも早いと思ったら、指田大佐じゃないんだ。」

「はじめましてと挨拶した方がいいのかな。指田大佐じゃなくて期待に添えなかったようだが。」

「いえ、あなたが来てくれたならよけいな手間が省けたわ。どうしてもパスワードが破れないのよ。」

「目的はなんだ？」

「邪魔なのよ、あの変なプログラムが。お陰でうちの *CAPERA-IIx* がまともに動かないの。消してくれない？」

「言われなくてもあのプログラムは消すよ。しかし、*CAPERA* は稼働させない。もうカルーンは消滅したぞ。」

「さあ、それはどうかしらね。まあ、あたしは帰ることにするわ。後はよろしくね。」

市瀬中尉って部屋の中ほどにいた。あたし達は入り口の所にいる。こういう状態でどうやってこの部屋を出るというのだろう。

「待って、あなたは本当にスパイなの？」

「あら、やあね。ここまできて、まだ状況認識の鈍い人がいたなんて。あたしがスパイ以外の何者だって言うの。」

「じゃあ、*POWLA-TWIN*の状態がおかしかったのも、みんなあなたの仕業だったというの？」

「そういうことになるかな。」

市ノ瀬中尉は悪びれた様子もなく、そんな台詞をはく。

「許せない…。」

「えっ…？」

あたしの中で何かがプチッと音をたてて切れた。こんな人のためにあたしは振り回されていたのかと思うと情けなかった。

そして、気がついたら市瀬中尉に向かって走り出していた。

「湯浅中尉、やめろ！」

和岐さんの叫ぶ声が後ろから追いかけてくる。でも、もう止まらない。

「えっ…。」

あたし自身は市瀬中尉に体当たりしたつもりだった。しかし、実際にはそこに市瀬中尉の姿はなかった。あたしは危うくその先にあるものに激突しそうになり、和岐さんが捕まえてくれなかったら、たぶんそれを壊していた。

「まさか、体当たりされるとは思ってもいなかったわ。でも、*POWLA* が壊れなくてよかったわね。」
そう、私が激突しそうになった物、それが *POWLA* 本体だったのだ。

「ホログラフィか。」

「というわけだから、後はよろしくね。」

かき消すように市瀬中尉の姿は薄くなっていく。

「まんまと一杯食わされたわけだ。」

「すいませんでした。」

あたしはやっと体勢を整えると和岐さんに謝る。

「仕方がないさ。しかし、怪我がなくてよかった。」

改めて *POWLA* をよく見てみると、透明なケースに被われていて、まるで何かのオブジェのような感じである。

「セーフティを外さないと、ここには高圧電流が流れていたんだ。」

和岐さんはそのケースを指さしながら教えてくれる。

「じゃあ、あたし…。」

「そう、危うく真っ黒焦げになるところだったんだ。初めから言っておけばよかったんだけどね。」
まるでのんびりと、人が一人死にかけたなんて感じさせないほどにゆっくりとした口調ではなす。

「さあ、早いところやることをやって帰ろう。」

「彼女の方は放っておいてもいいんですか？」

「今さら追いかけても追いつかないよ。それに近い将来、必ず彼女には会える。心配しなくていいよ。」

ここへ来て、和岐さんは完全に謎解きを済ませているようだった。それならそれで、和岐さんに従うしかあるまい。

和岐さんは手早くキーボードから何かパスワードを打ち込んでいる。どうやら、それでセーフティが外れたようだった。透明のケースがゆっくりと動く。和岐さんは難しい顔をして *POWLA* の中に入っていく。

そこには見たこともないような巨大なキーボードがあった。そうキートップが 500 個近くある。和岐さんは小さくため息をつく、一気にキーを叩き始める。まるで 15 年分の思いをぶつけるように。

あたしとハスラムさんは正直言ってすることが何もなかった。ただ和岐さんがやっていることを見ているだけ。

どれくらい時間が経っただろうか？ ゆっくりと和岐さんは顔を上げると、やっと笑顔を取り戻していた。

「終わったよ。さあ、帰ろう。」

「消去できたんですか？」

「いや、完成させたんだ。もう、これで *POWLA* のパフォーマンスが落ちることはないはずだ。もし、またこのプログラムのせいでパフォーマンスが落ちるようなことがあっても、今度は端末機

側から操作できるように改良したから大丈夫だ。」

「じゃあ、終わったんですね。」

「ああ、終わったんだ。」

本当にこれで終わったんだという気がしてきた。三好先輩がキャティに現れてから、ファズアースのこと、*POWLA* のこと、なんかいろいろとあったように思える。もう、あれから1ヶ月近く経っているんだ。

もう、誰が三好先輩なのかどうでもいいような気がしてきた。とにかく早く帰ろう。帰ってゆっくり休みたい。

第六章 「そして真実は語られる」

H6. 24. APR

第七章 「夕焼け空のその後で」

POWLA から帰ってきた 3 日後、今日は POWLA II の完成記念パーティが開かれていた。和岐さんが信州支局の人間を全員招待したのだった。そして、俺はこの大パーティを最後に連邦政治局から姿を消すつもりだった。

会場のあちこちで、カルーンの話や POWLA-KNIGHT の話題、そして完成したばかりの POWLA II の話題と最近立て続けに起きた話題で持ちきりだった。

とりあえず俺は科学部からも文化部からも少し離れた位置にいた。ここまで来て、妙な感傷は残したくない。ハスラムは謎のままでいなくなりたいのだ。

「さて、このへんでスペシャルゲストを 2 名紹介します。」

いつのまにか、和岐さんが中央のステージでマイクを握っている。

「今回の事件では重要な役を演じてくれた 2 人です。彼等がいなかったら、この事件は解決しなかったでしょう。」

和岐さんが手で示す方向にスポットライトが向けられ、男女 2 人がステージに向かってくるのが見えた。その 2 人がステージに近付いてきて、誰だか分かる頃には会場のあちこちでざわめきが起こり始める。

男の方はグレン大佐だった。しかし、問題は女性の方だ。なぜ、彼女が…、市瀬中尉がここにいるんだ？

「さて、皆さん、お静かに願います。いろいろと憶測も飛び交っているようですが、知らない人もいますので、ここで改めて紹介します。」

和岐さんはここでわざと言葉を切って会場をぐるっと見回す。そこで文化部の連中を見つけると、ちょっと頷いてゆっくりと話し出す。

「ベルギー本部局情報部所属のグレン大佐と同じくサンフランシスコ支局情報部所属の市瀬中尉です。市瀬中尉は現在は信州支局の文化部にいますから、知っている人も多いでしょう。」

会場のざわめきが戻ってくる。とくに文化部周辺のざわめきは大きかった。まあ、それは当然だろう。

グレン大佐は和岐さんからマイクを受け取るとちょっと躊躇するような表情を見せて暫く立ちすくんでいた。しかし、それも長い時間ではなく、すぐに気を取り直すと大声で話し始める。

「皆さん、暫くの間私の話を聞いて下さい。」

しかし、すぐには静かにならなかった。とくに文化部の周辺ではステージに向かって何かを叫んでいるものが何人かいる。明子ちゃんがとりあえずそれらの連中を諫めているのが見えた。

次第に小さくなるざわめきに満足したのか、グレン大佐は会場をゆっくりと見回すと大きく頷いた。

「ありがとうございます。ちょっと説明したいと思います。最初に断っておきますが、情報部ではこういうことは日常茶飯事であり、こういう場で内情の説明をするなんてことは異例のことなのです。本日はここにいる和岐さんのための願いで説明しに来ました。」

会場にいるほとんどの人が、ほぼ同時に和岐さんの方を見る。

「彼女…、市瀬はさっきの紹介でもあったように情報部の人間です。今回の事件ではカルーンの内情を偵察するためにスパイとして潜入して貰いました。奇しくもカルーンでの彼女が任務が連邦政治局へスパイとして潜入するということになってしまったため、いわば二重スパイという形になっ

てしまいました。時として、文化部の皆さんには多大な迷惑をおかけした訳ですが、この場を借りてお詫びしたいと思います。」

グレンは深々と頭を下げるとマイクを一度和岐さんに戻した。

和岐さんはグレンから受け取ったマイクをそのまま隣の彼女に渡す。彼女はやや躊躇するような感じを見せたが、和岐さんに促されてステージの中央まで出てきた。

「あの…、市瀬です。本当に申し訳ありませんでした。とくに文化部の室長には迷惑をかけてしまい、いずれきちんとお詫びをしたいと思っています。あと…、こういう場でなんですが、この事件の最中に亡くなった情報部の三好少尉とは研修所時代の同期でした。心からのご冥福を祈ります。」ズキッ…、なんとなく心が痛む。実際に三好栄次という人間が死んだということに彼女が無関係でない以上、責任を感じなくていいと言っても無理だろうなあ。

彼女の今の挨拶で、三好栄次の死がみんなの意識の中に蘇ってしまい、なんとなく重苦しい雰囲気の流れてしまう。せっかくの *POWLA II* の完成記念パーティなのに…。

「はい、ありがとうございました。パーティはまだまだ続きますので、2 人にもこのままパーティを楽しんで頂きたいと思います。」

和岐さんはわざとこのことには触れないようにと考えたのか、今まで以上に明るい感じで強引に進行してしまう。

「さて、ここでもう 2 人ステージに上がって貰いたいです。まず、情報部付きのハスラム中尉、お願いします。」

えっ、俺…？

「さあ、どうぞ。」

まるで俺の前に道が出来るかの様に、俺とステージの間にいた人達がスーッと避けていく。みんなの視線が一斉に集まってしまい、断る雰囲気もなくなってしまった。

和岐さんにはこのパーティの後、そっと連邦政治局を去るからと言っておいたのだが。どうもかえってまずかったのかもしれない。仕方がない、なるようになれだ。

「ああ、やっと来ましたね。改めて紹介しますが、彼はハスラムといって私の古くからの友人です。今回の事件に関して彼の類稀なる行動力と情報量が必要だったので、現在臨時局員としてここにいて貰っています。」

不本意だけど仕方がないので、形だけの会釈をしておく。このまま挨拶をしろなんて言ったって、絶対にやらないぞ。

「実際に彼の協力がなければ、カルーンの本部を叩くことは出来なかったと思います。またちょっとですが、*POWLA II* の開発にも協力して貰っています。しかし、残念なことに彼は都合でこのパーティの後に連邦政治局を去ることになっています。という訳でぜひともこの場で感謝の言葉を送りたかったのです。」

和岐さんの言葉が終わると同時に大きな拍手が会場に沸き起こる。それもすべてが俺に対してである。一瞬どうしてリアクションいいか分からず、仕方がないのもう一度頭を下げる。これは拍手に対するお礼というより、騙していることへの陳謝に近い。

「さて、最後になりますが、ハスラムにはもう一つだけお願いがあるのですが聞いて貰えるでしょうか？」

ん…？挨拶なら絶対にしないぞ。

「実は返してほしいものがあるのですが。」

「返してほしい物？」

返せ…と言われても、何を返せばいいのか俺には心当たりはない。あるとすればせいぜいハスラム名義のＩＤカードくらいだ。

「ええ、我々信州の人間にとって一番大事なものを持って行って貰っては困るんです。」

「ＩＤカードなら後で局長に返すつもりだったが…。」

「ああ、そうですね、ＩＤカードももう必要ない物ですから返却して貰わないと困りますね。」

ＩＤカードも…ということはまだべつに何かがあるということか。となると本当にあとは心当たりがない。少なくとも和岐さんから預ったものはなかったはずなんだが。

会場内でもこの和岐さんの思わせ振りの発言が気になり出したのか、またあちらこちらからざわめきが発生している。

「申し訳ないが心当たりがない。もし返さなくてはいけないものがあるならば言い付けてくれ。」その瞬間だった。和岐さんが心なしにニヤリと笑ったのを俺は見逃さなかった。と同時に「しまった」という気持ちが沸上がる。和岐さんがあの表情を見せた時は必ず何かを企んでいる時だ。しかし、言ってしまった言葉はもう取り消すことが出来ない。

「三好栄次…を返してくれ。」

会場のざわめきが一瞬にして静寂に変わる。和岐さんが何と言ったのかみんなが理解できなかったせいだと思う。たぶん、今ここで和岐さんの台詞を正確に理解したのは俺と柴野さんくらいだろう。

「返せと言われても…。」

「まだ連邦政治局には三好栄次という人間が必要なんだ。」

「和岐、死んだ人間は２度と帰ってきはしないよ。」

「三好栄次はまだ死んではいない。そのことを一番良く知っているのはハスラム、君だ。」

柴野さんが報告したのか…？会場内を見回して柴野さんの姿を捜す。しかし、彼女は俺と視線が会うと黙って首を横に振る。

まさか明子ちゃんが気がついていたのか、いやそれはありえないはずだ。和岐さんのはったりとも考えられる。

再び会場がざわめきに包まれる。ようやくここで何が行なわれているかみんなが理解し始めたのだ。既になんらかの形で決着を付けなければならない恰好となってしまった。

ばれているとしたら、いつ、どこで？和岐さんの前ではとくに気を使ってたつもりだ。

「まだ思い出せないのか、私は未公認ながらも一応能力保持者だということを…。」

「あつ。」

マイクを外して俺にだけ聞こえるような小さい声で、和岐さんは決定的な台詞を叩きつける。完全に忘れていた。確かにまだ和岐さんが連邦委員長だった時にそういうふう聞いた覚えがある。もし、和岐さんに意識を読む能力があれば、初めからばれていたことになる。

「ハスラム、君には本当に感謝している。しかし、これからの新しい時代には、もうハスラムという人間は必要がないんだ。このまま君が連邦政治局を去ってしまえば、永遠に三好栄次も戻る機会を失ってしまうだろう。なにせ彼は死んだことになっているんだからな。」

実は正直言ってこの後のことはまだ何も考えていなかった。ただ漠然とほとぼりが冷めた頃を見計らって三好栄次として戻るつもりだった。しかし、よく考えればそれでは明子ちゃんをいつまでも

任務に縛りつけることになる。しかも後になればなるほどつじつまが合わなくなる可能性が高く、下手をすれば彼女の責任問題にもなりかねない。

俺がここですべてを公開すれば、彼女のやったことは任務の一部であると証明することが出来る訳で、そういう意味ではここで正体をばらすのが最善といえるかもしれない。

やはり和岐さんにはかなわないか…。ただどうしても一つ気になるのは、和岐さんが本当にこういった理由だけでこうした方法を取ったのかという点だけだけど。今はそれを追及する必要はないだろう。

実に暫くぶりに変装を解く。素顔になったのは何週間ぶりだろうか。

「ありがとう。そして、おかえり。」

ワァーッという喚声。その中には罵声も混ざっているに違いない。とくに科学部あたりが恐い。

「さあ、仲間が待っている。行きたまえ。」

和岐さんが指差すところではみんなが一斉においでおいでと手招きをしている。

「はい。」

俺がステージから降りていくとみんながワッと取り囲む。

「本当にたっちゃんだろうな。」

「それはどういう意味ですか、くまさん。」

「いや、だって、ハスラムが持っていた知識は通常では絶対に知るはずのない情報まで含んでいたし、それがたっちゃんと同一人物とは思じられないし。」

「そうそう、たっちゃんならどこか絶対に抜けているはずなのに、ハスラムは完璧だった。」

「シモさんまでそんな…。」

「あたしはそんなに完璧だったとは思いませんでしたけど。」

柴野さんはそう言ってクスッと笑う。

「あっ、じゃあ、柴ちゃんは知っていたんだ。」

「まあ…、でも本人が必死に口止めしていたもんだから、一応見て見ぬ振りをしていたんですけどね。あれだって、三好せんぱいが余計なことをしなければ分からなかったんですよ。」

「余計なことって？」

「ほら、あたしと明子ちゃんまでファズアースに行った時、ステーションであたし達のことを待ち伏せしていたんです。たぶん、明子ちゃんが気になってやったんでしょうけど。あの時一緒に行動したお陰で、ハスラムが三好せんぱいだって分かったんですから。」

あれっ、そういえばその明子ちゃんがいらない。さっきまではこの輪の中にいたはずなのに…。

「たっちゃん、あっちで *Ryo* が呼んでいる。」

「早く行って謝った方がいいぞ。なんせ一番お前のことを心配していたのは *Ryo* だから。」

「分かっています。すぐそばにいましたから。」

明子ちゃんのことはちょっと気になるけど、とりあえず *Ryo* 先輩に報告しないとあとが恐い。

シモさん達からちょっと離れた場所に *Ryo* 先輩とグレンが立っている。

「申し訳ありません。」

他に言葉が思いつかない。とりあえず謝った方がいいだろうと向こうが何かいう前にそう切り出した。

「お前はなあ、俺のことを騙すなんて 10 年早い。葬式代はあとで返せよ。」

「はい…。」

おもわず苦笑いをしてしまう。そういえば盛大な葬式までやってくれたんだっけ。

「ミヨシ、謝る必要はないさ。情報部員としては立派な行為だ。そして、今までの君に一番必要だったものだ。おめでとう、そして、よくやった。」

グレンから面と向かって褒められるとなにやらこそばゆい気もする。ただ、グレンの目が何とも言えない不思議な色をかもしだしているのが面白かった。

「たっちゃん。」

いつのまにか市瀬中尉がすぐそばに来ていた。

「お互い様だから何も言うつもりはないけど…。」

言葉が終わらないうちに手が飛んでくる。避ける間もなく、左頬にきれいな平手打ち。

「だからっていきなりぶつことはないだろう。」

「これはあたしがたっちゃんのために泣いた分よ。」

一瞬、言葉に詰る。彼女が俺のために本当に涙を流してくれたんだとしたら、それは確かにすごいことだった。

「なによ、なんか文句あるの？」

「いや、べつに…。」

自然と笑いが込み上げてくる。悪いとは思うけど、止められそうになかった。彼女を怒らせないうちに早々とここを立ち去った方がいいかもしれない。

「じゃあ、またあとで。」

グレンと Ryo 先輩に軽く挨拶をすると、今度こそ明子ちゃんを捜さなくてはと会場中を駆け回る。しかし、さっきまで確かにいたはずの明子ちゃんの姿はどこにもなかった。そうこうしているうちに会場を一周してしまう。

科学部と文化部の周辺はまだ騒がしく、どちらかというとな近寄りたくなかった。しかし、もはや誰かに聞かない限り明子ちゃんの行方を捜すのは難しいだろう。俺は文化部の集団の中でもちょっと離れた位置にいるアリコちゃんの袖をそっと引っ張る。

「アリコちゃん、明子ちゃんを知らない？」

「湯浅先輩なら気分が悪いから外の風に当たってくると言っ、ちょっと前に出て行きましたけど。」

「あ、ありがとう。」

明子ちゃんがこういう時にどこに行くかはだいたい見当が付く。絶対に空が見える場所、それもこの時間なら夕陽が見えるような場所だ。この連邦政治局の建物で夕日が眺められるとしたら、3号館の屋上しかない。

他の建物でも空を見ることは出来るけど、いずれも別の建物に邪魔されて夕日を見ることが出来ない。3号館が一番背が高いというのもあるんだけど、眺めの良さでは他に思いつかない。

一度外に出てから3号館に入り直す。どういう訳だか、一番階数があるくせしてエレベーターが付いていない。こんな建物の屋上に上がるなんて、よっぽどの物好きくらいしかいない。だからこそその穴場だったりする。

一気に12階まで駆け登って少し息が切れる。あとの20階は必然的にゆっくりになってしまう。それでも並みの人よりはるかに速いはずだ。

屋上へは大きな鉄の扉がついていて、女の子の腕ではちょっと辛いかなという感じ。でも、隙間が少し開いているのを見つけて、俺の予想が違ってないことを確信した。俺は思いっきりその扉を押し開けた。

扉は結構大きな音をたてて開いた。風がものすごい勢いで階段の方に流れ込んでくる。冷たいというほどでもなく、むしろ心地よささえ感じるほどの風だ。

ゆっくりと屋上を見渡す。それほど広い屋上でもない、ここに来ればすぐにでも見つかると思っていたが、意外にも誰の姿も見えない。一瞬、俺の勘もいい加減なものだと思いながら引き返そうとして夕陽が目に入る。

いたっ！

気がつかない訳だ、狭い屋上の中で唯一見えなかった場所に明子ちゃんは立っていた。ちょうど沈みかけて真っ赤に広がっている太陽、明子ちゃんの身体はその中にすっぽりとおさまっていた。

俺はゆっくりと近付いていくと、はっきりとした口調で話しかけた。

「湯浅中尉、ただいま戻りました。」

しかし、返答はない。聞こえていないということはないと思うんだが、やっぱり怒っているんだろうか。

「湯浅中尉。」

「うるさいわね。」

「は…？」

「あたしは一人で考えたくてここに来たのに、どうして邪魔しにくるのよ。」

「いや、邪魔しに来た訳では…。でも、任務完了の報告はしないと。」

これなら普通に怒っていた方がましだったかもしれない。

「やっぱり、怒っている？」

「怒る？何に対して？」

「何につて、そばにいたのに黙っていたこととか…。でも、それも一応は任務の内だったし。あそこで中尉に本当のことを話すわけにもいかなかったし。」

「そうでしょうよ。あたしが心配して、悩んでいたとしても、あなたにとっては任務の内ではなかった。ミクラが本当に巧くやってくれたのかさえ確認できなくて、それでいて他の人のようにあなたを忘れることも出来なくて、あたしはいったいどうすればいいのかさえ分らなかった。それでもあなたがそれを知らなければ、あたしも何も言うまいと心に決めていたんだけど、あなたはそれをすべてを知っている。」

こっちに振返りもせず一気にまくしたてる。

「じゃあ、ハスラムと三好栄次は同一人物ですと教えてやればよかったのか？」

「そんなことできる訳ないでしょ。」

「じゃあ、いったいどうして欲しいんだ？」

「じゃあ、黙っていてよ。あたしは一人で考えたいんだから。」

これじゃ堂々巡りだよ。けっこう明子ちゃんって厄介な性格しているんだ。

「湯浅中尉が心配してくれていたことはよく分っています。ハスラムはそんな中尉の力になるためにすぐそばにいたのですが。」

「それって本当？」

「嘘はまだついていなかったと思いますが。それとも、そんなに信用ないですかね。」

「信用なんてある訳ないじゃない。」

「それは三好栄次、ハスラム、どっち？」

「莫迦…。」

それっきりまた黙りこんでしまう。困ったな、やっぱりやり方を失敗したかな。

夕陽は完に全地平線の下に消え去り、空は薄いピンクと淡いブルーとが混ざったような色をしている。風はゆっくりと明子ちゃんの髪をかきあげていく。

実際、どうしようもなかった。弁解のしようもないし、するつもりもない。ただ、じっと待つしかないなと覚悟を決めた時…。

「お帰りなさい。」

蚊の鳴くような細かい声が響く。

こんな短い言葉だけど、これで本当にすべてが終わったと実感できた。大きく息を吸い込んで、そして…。

「ただいま。」

第七章 「夕焼け空のその後で」

『夕焼け空のその後で』 —空翔ける羊飼いの群れシリーズ 5—

H6. 25. APR